

校長室より

共学共高

第

101

号

令和8年10月5日発行

発行責任者

白梅学園高等学校長

武内 彰

1年6組 根拠を見つける！ 現代の国語の授業

10月2日（金）、1年6組の現代の国語の授業を参観した。M先生はチャイム開始前から待機している。生徒たちが「お願いします。」とあいさつをして授業開始となる。M先生から「漢字テスト返却されましたね。担任のK先生に何か言われましたか？」と問いかけがある。生徒から「・・・」と返答がある。あまり出来が良くなかったのだろうか。

さて、いま扱っているのは2016年の同志社大学の入試問題である。前回までにある程度読解しており、本時は設問4からとなる。M先生が復習を兼ねて確認をする。「1から5段落目までに何が書かれていたのか」というと、『サイエンスとは元々どういう意味なのか？』ですね。」「6～8段落目は、サイエンスが現代の『科学』の意味になるまで、ですね。」

「設問4では『サイエンスが科学を意味するようになる』とはどういうことかが、問われています。本文では、『観察や実験など経験的方法に基づいて実証された法則的知識』という『科学』を意味するようになったのは18世紀・・・とあります。Kさん、設問の選択肢はどれを選びましたか。」Kさんは選択肢2を選んだようだ。どのように考えたのか、自分で説明をする。選択肢1の誤っているところ、同様にして選択肢3と4と5の誤っているところを指摘する。M先生はそれを認めていく。「すなわち、つまり、という語句の後に要約の部分が出てきます。」要約部分をみると、わかりやすいようだ。・・・Kさんの解答が正答である。

続いて設問5を考えていく。生徒たちは端末内のアプリを開いてみる。ここで、M先生が本文中の「収斂」は何と読みますか？と投げかける。先生が「せーの」というと生徒たちは声をそろえて「しゅうれん」と答える。先生は「しゅうれんの意味は？ペアで話し合ってみて。」と投げかける。生徒たちは隣同士で確認し合う。先生が、『『統合』に近い語句ですね。』と伝える。先生は、「本文に『それゆえ、さまざまな変遷を経ながらも、明治末期には『サイエンス』の訳語は『科学』へと収斂していったとみることができる』とあります。」「その説明をしてください。」と投げかける。生徒たちは、端末のアプリ内に自分の答えを記入していく。先生は生徒たちの解答の状況を自分の端末で見ることができるようになっ

ている。

続いて、先生は「9～15 段落目には、日本では『サイエンス』をどのように理解してきたかが、書かれています。」と指摘する。その後、生徒たちは、選択肢の何番を選んだのか、理由と共に少人数で話し合いをしていく。話し合いの後に、指名された生徒は「3にしました。」と答える。そして、どのように考えたかその根拠を一つ一つ言っていくのである。3番が正答であった。



続いて設問6は内容合致問題である。本文の内容と合っている選択肢を2つ選ぶのである。各自で端末内のアプリに解答を記入していく。先生が、「この選択肢の内容は本文のこのあたりに書かれているな、というところを1分30秒で見つけましょう。」と指示をする。その後、少人数グループで話し合いをする。指名された生徒が「3は確定です。」という。先生は「これは絶対違うな、という選択肢はどれですか？」と問う。生徒は「6は違います。『欧米から批判されている』ところは5ページ目に書かれています。」と応じる。同様にして誤答である根拠を確認していくのである。途中で、本文中に出てくる『淵源』の読み方を問われると「えんげん」と出てくるところがなかなかだ。「深淵」(しんえん)から類推しようだ。

選択肢2が正答である根拠を1ページ目の3段落から確認し、選択肢5は本文中に書かれていない記述があることを確認する。こうして入試問題を解いていくのである。

生徒たちはよく鍛えられているのか、的確に根拠を見つけて正答を選ぶことができている。これを単に個人に帰すのではなく、集団での学びとして成立させているところがよいなと感じた。生徒たちには是非、読解を楽しんでほしいものである。

(共学共高とは：本校のディプロマポリシー（育てたい生徒像）の一つで、「共に学び、共に高め合う」生徒の姿を表す）